熊本保健科学大学
週刊 NEWSLETTER
2022.10.28
第 170号
発行 入試・広報課

## 唯一の「脳卒中看護」認定看護師課程

# ナース８人 さらなる専門性目指す

キャリア教育研修センター
認定看護師教育課程課程長　飯山 有紀准教授

キャリア教育研修センターは、平成21（2009）年に認定看護師教育課程を開講しました。認定看護師とは日本看護協会の認定制度で、ある特定の看護分野において熟練した看護技術と知識を有する看護師をいいます。2021年12月現在、認定看護師は2万2577人います。

200人を超える本学の修了生は、認定看護師の「看護実践」「指導」「相談」という3つの役割を持ち、病院や施設で活躍しています。看護師免許は更新制度ではありませんが、認定看護師教育課程はリカレント教育の一つとして、看護師が専門性を高めることができる制度です。

脳卒中看護認定看護師を目指せる教育課程を有するのは、本学のみであり、今年度は、遠くは関東や関西、そして中国地方から、脳卒中看護への熱い思いをもったナース達が８人受講しています。４月に入学した後、仕事をしながらｅラーニングで受講し、８月中旬以降は本学で対面授業を受けています。研修生は、成人学習者として自らの課題と目標に真摯に向き合い、主体的に学修を重ねています。先日は、「早期離床と日常生活活動自立に向けた支援技術」の技術について、演習を行いました。改めて看護技術を学ぶことで基本に立ち返り、対象者への個別の看護を考えていました。

いつもは病院で看護学生に対して実習指導をしている研修生ですが、11月７日（月）から始まる病院での臨地実習に向けて、緊張感が高まってきているようです。患者さんとの出会いの中で、エビデンスのある看護技術とともに脳卒中看護とは何かを深められることを期待しています。**＝写真は脳卒中患者のポジショニングを検討する研修生たち**

# 尊い命に感謝 冥福祈る　動物慰霊祭

実験や研究のために尊い命を捧げた実験動物を慰霊する動物慰霊祭が19日（水）、動物舎横の動物慰霊碑前で行われました。

竹屋元裕学長と学生代表の片山和里さん（看護学科１年）が慰霊の詞を述べました。この後、木下統晴理事長、竹屋学長、動物実験委員会委員長の田中聡教授、学生代表の中村有伽さん（看護学科１年）が献花した後、教職員たちも動物たちへ感謝の気持ちを込めて花を捧げ、冥福を祈りました。（総務課）

**参列者を代表して慰霊の詞を述べる竹屋学長**

**マイ授業**

先生方に自身の授業を紹介してもらいました。題して「マイ授業」。

## 「基礎作業学技法」「基礎作業学」

リハビリテーション学科生活機能療法学専攻　爲近　岳夫准教授

# 園芸、革細工、木工…多彩な作業を経験

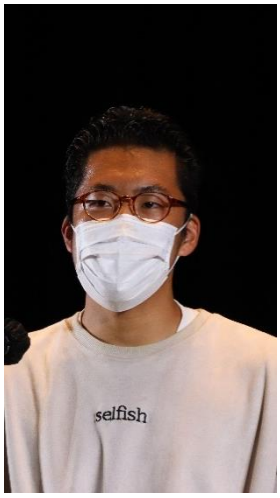
作業療法士は、「作業」を対象者の治療に用いる医療職です。その「作業」とは、対象者が生活するうえで行うすべての生活行為をいいます。食事や着替えなどの身の回りのことから、仕事や遊び、趣味活動や社会活動などを作業と捉え、障害や病気などによって作業がうまく行えなくなった対象者がふたたび作業ができるように支援をします。人によって作業のやり方や、好きな作業は様々です。ですから、対象者に合わせてオーダーメイドの作業療法が提供できるように、学生自身が多様な作業を経験しておくことが望ましく、人に合わせて作業を組み立てる考え方を身につけておく必要があります。

私の担当する「基礎作業学技法」では、園芸、革細工、木工、陶芸などの作業を経験してもらいます。作業の仕方を学び、作業を純粋に楽しんだり、それに伴うリスクを考えたり、学生自身の心や体に生じた変化を振り返ってもらいます。また、入学して出会ったばかりのクラスメイトと作業を共にすることで自然に話せたり、仲良くなったりすることも感じてもらいます。

「基礎作業学」は、体験した作業を分析し、作業療法士として作業を治療に用いるための基礎を学びます。「この作業をすると気分はどうだった？」「どの筋肉を使った？」「この作業をやるにはどんな能力が必要になる？」「どうすればこの作業をもっとやりやすくなるだろうか？」などと作業を様々な角度から分析します。学生同士で話し合いながら答えを探すのもまた、かけがえのない「作業」です。

園芸作業で収穫したサツマイモを並べて記念撮影する学生たち

# 仲間がいることの大切さ実感　<u>３年ぶりの杏祭を終えて</u>




澤本　涼　杏祭実行委員長

今年の杏祭を終えて改めて気づいたことがある。それは、仲間がいることの大切さだ。

私の杏祭は今年の３月から始まった。ステージ機材を貸していただける企業さんとの最初の打ち合わせだ。そこで、担当の方から問われたのは本当に杏祭を開催したいのかという「熱意」。それだけ、このコロナ禍に３年ぶりの対面開催をするのは大変なことだったのである。

共に運営する実行委員を募ると、100人程が集まった。私一人で動き出し、不安でいっぱいだった杏祭をその瞬間「開催できる」と確信できたのを私は忘れない。

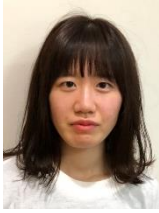
部署長と行ったzoom会議もとても印象的だった。どのようにして私の熱意を伝えるか。どのようにして意見が飛び交う会議を作るか。どのようにして部署長と仲良くなるか。試行錯誤を繰り返し、会議の回数を重ねるたびに、内容が良くなっていくことが嬉しかった。

コロナ禍の大学生活において新たな友達との出会いは少ない。ましてや、今回のような高い志を持った仲間ならば尚更だ。このような出会いをこれからも大切にしていきたい。（リハビリテーション学科理学療法学専攻２年）

第38回くまもと車いすふれあいジョギング大会＆パラスポーツ体験Dayが９月24日（土）、えがお健康スタジアムで開催されました。ボランティアとして参加したリハビリテーション学科生活機能療法学専攻１年の村上沙耶さんに感想を寄せてもらいました。

## 「くまもと車いすふれあいジョギング大会」に参加

# サポート通じ縮まった心の距離



村上　沙耶さん
（リハビリテーション学科
生活機能療法学専攻１年）

私がくまもと車いすふれあいジョギング大会ボランティアに参加して感じたことは、人をサポートすることの楽しさややりがいです。このボランティア活動は大会参加者が安心して大会に挑めるように参加者と一緒に走ってサポートするというものでした。私は男子高校生のサポートをしました。レース前はお互いに緊張して「よろしくお願いします。頑張りましょう」というようなほんの少しの会話しかできませんでした。

運動はあまり得意ではない私でしたが、担当した選手が一生懸命に走っている姿を見て、私も最後までサポートし切ろうと決めて、声掛けをしながらサポートしました。レース後、担当した選手が笑顔で「一緒に走ってくれてありがとうございました」と言ってくれました。その瞬間、活動を共にすることで心の距離も縮まるんだということも実感しました。この日は、選手のご家族や運営の方ともいろいろな話をすることができました。今回の経験を糧に、これからの学修にも意欲的にとりくんでいきたいです。

## 私のお薦め記事

（このコーナーはDive! LSP１年生が担当しました）

総合型選抜で入学した1年次生が、日々の新聞や雑誌などから気になる記事をピックアップし、毎週紹介します。これは、Dive! LSPと銘打った教育プログラムの一環です。

### マイナ保険証、24年秋移行
### 政府調整、カード普及狙う

（2022年10月13日付日本経済新聞３面）

**概要**

政府は2024年秋をメドに健康保険証を原則廃止し、マイナンバーカードと一体化した「マイナ保険証」に切り替える。マイナ保険証利用者は個人向けサイトで過去に受けた健康診断や診療、投薬の記録を確認できるようになる。政府がマイナンバー制度の定着を促す一方で、ネット上では個人情報流出を懸念する声が上がっている。

（リハビリテーション学科理学療法学専攻・藤下琴音）

**コメント**

現在、常に財布には保険証、マイナンバーカードが入っている。それがひとつにまとまることはとても便利なことに感じた。マイナンバー制度が定着することで正確な情報を簡単に得ることができ、病院、役所などは特に作業の効率化が進む。その一方で、個人情報がどのように守られていくのか、また紛失した際にどう対応すれば良いのかなどの不安な部分について、これからしっかりと説明していく必要性があると感じた。また、定着させていくためには、マイナンバー制度の魅力を伝えていくことも大切だ。

（看護学科・兒玉真歩）

母校のＰＴＡ会員を前に話をする中尾さん

**◆必由館高校PTAが大学訪問**　必由館高校PTA25人の方々が20日（木）、本学にご来学されました。まずは入試・広報課から大学概要の説明をお聞きになられた後、Ｉ号館、図書館エリアとアリーナを見学されました。訪問の最後には必由館高校卒業生でリハビリテーション学科言語聴覚学専攻４年の中尾舞さんが「４年間の大学生活について」と題し自身の大学生活を振り返り、話をいたしました。同校教頭の坂本先生からは「生徒の目線に立った指導や快適に学べる環境づくりがなされている」と感想をいただきました。（入試・広報課）